

# 子どもと時間

芹沢 澄子

——時計のない環境下で子どもたちは、自分たちの時間をどう使うのだろうか。私たちの実践計画はそこから始まった——

## はじめに

いざテーマに取り組んでみるとわからないことだらけ。試行錯誤の連続の末、「時計のない環境」を設定できたのは、ある平日の午前中のたった三時間に過ぎな

かった。その経過を準備調査の段階から実践報告迄をまとめたものは、第五十回目の保育学会で発表されている。

第1報で尾崎は、幼稚園教育の目的そのものを幼児教育者あるいは保育担当者の立場より考察し、保育者自身

の時間意識の中に目的にせまる緊迫した「現在」と「将来」を結ぶ意識が、日常的に欠如していることを指摘している。特に教育の目的という未来において、実現しようとする何ものかに、現在の教育という営みがたえず影響をうけたり動かされることを、私たちは敬遠する傾向があるのではないかという疑問として、大場牧夫の実践論を回想しつつ投げかけた。第Ⅱ報は、幼稚園や保育所で現在使われている教材用物語の中にその作者の時間意識を探ろうとするものであった。言い方を替えれば、教材の中に時間経過をどの程度扱っているものを適当と考えて、子どもたちに提供しているかという保育者の時間に対する意識の実態を探ろうとするものでもあった。

### 子どもと時の長さ

第Ⅱ報で、飯村は次の様に報告している。

「赤ずきん」のように物語の完結までの時間は、せいぜい三〜五時間というものから、長いものでは「白雪姫」の十年〜十五年、最長のものとして「浦島太郎」があげ

られた。時間経過を直接現わすことばとしては、「ある日」「一日」「翌朝」「次の日」というもので、一年以上を要するものには「三月もすると」（かぐや姫）、「三年間」（浦島太郎）、「何年か経って」（一寸法師）を例に引いている。いずれも現在から未来にかけて、刻々過去に変わってゆく現在からみた未来を示すことばは、ストーリーテリングに緊張感を与える上で慎重に用いられている。しかし、飯村が調べた限りにおいても、多用されている過去を示すことばとして、「きのう」「夕べ」「前の日」があげられる。成人間では、日常的に用いている二日前の「オトイ」、二日後の「アサッテ」などの表現にぶつかることは、極めて少ない。子どもたちの会話の中でも、又保育活動の中で保育者が用いることも稀であった。今回の実践の終期に近い頃、五歳児集団に対して、具体的事例についてカレンダーを用いて「あした」「あさって」「きのう」「おととい」の意味を理解させたクラスがあり、興味関心を示す子が多かったという。

物語の中には、時計と時刻が重要な意味を担っているものがある。時計がなくては物語が進まないものとしては、十七世紀に書かれた「ガリバー旅行記」がある。ガリバーが小人の国にたどり着き（一六九九年五月四日）、そこに滞在すること九か月と十三日、その島を離れたのが一七〇一年九月二十四日午前六時と記されている。ガリバーは携帯（懐中）時計を携えていたと書かれており、年代、月、日、時間まではっきり書かれている。又、「シンデレラ物語」では、十二時を知らせるという時計が重要な役割りを負っている。日本に一定の時刻に点鐘とメロディーを発する機械式時計（自鳴鐘）がヨーロッパから持ち込まれたのは、一五五一年（天文二十年）というから、その百五十年後のことであれば、ガリバーが小型で携帯可能な時計を用いたこと、城には自鳴鐘といわれる機械時計が置かれていたであろうと想像した。

教材の中で、時や時刻の表現方法は、子どもの発達過程の中で、時や時刻の概念がどのように内面化されてい

るかということと無関係ではなく、相互的であろうと思う。物語が口承文化の時代から現代の児童文学といわれる記録物語になっても、時や時刻を表現する方法は、物語の進展やおもしろさをより容易にイメージできるものでなくては、子どもたちには受け入れられないだろう。

一方、語り部や、物語の作者たちは、子どもたちの未発達な時や時刻の概念を承知の上で創作し、反面その概念発達を促進する方法を凝らしている作者もいたかもしれない。

「かぐや姫」や「浦島太郎」のような壮大な物語を通して、時の概念という発達の最近接領域（ヴィゴツキー）を配慮したり、時や時刻についての常識を超越したところで創作してやれという、隠された意図が働いているとみるのも楽しい。

子どもたちが、「時」又は時間経過をどのように理解し、ことばで表現するかを、いくつかの設問から答えもらった。それによると、「昨日は新しいですか、古いですか」と聞くと、子どもは「昨日はもう終わったから

古い」「昨日は今日よりも先に来たから古い」と答える子が多い。混乱なく理解し、ことばとしても使うことができる。では「明日はいつ来ますか」の質問に対し、「今日の次の日」と答えた子が圧倒的に多かった。その他「一回寝たら来るよ」「新しく来るのが明日」「夜中の十二時がくると明日になる」「今日から明日に来る」など、時の経過によってやって来るものと理解している。「ではお話に出てくる昔々という昔はいつのことですか」という質問には「ずっと前」とか「ずっと古い」とと答えた。又「死んでいった人が生きていた時」「私たちがいない時」「侍がいた時」「江戸時代のこと」「まだみんなが生まれていない時」ということばの表現から遠く過ぎ去った時というより、身近な人の生死との関連や時代背景といったものに結び付けて捉えている様子が伺える。「では大人と子どもとどう違いますか」の質問に対して「背が高い」と答える子が圧倒的に多く、ベルギーの心理学者ドクロリの年齢観と一致する。又「大人は勉強を教えてください」「おかあさんは大人だ

から、お料理が上手」「大人は仕事をするけれど、子どもは遊ぶ」「大人は顔と洋服とやるのが違う」などと、能力差や社会的役割の違いと結びつけた答えも多い。

「では大人になるのはいつ」の質問に対し、「二十歳になると大人になる」「大学が過ぎたら大人に」「お酒やタバコが吸える年になると大人」「結婚してから」など、自分の知識の中から大人にみられる行動様式と対比させた答えであり、時との関連で答えると「まだまだ」とか「ずっと先」のようになる。



又、短い文章の中から、子どもの時間意識について調べてみた。「ウサギとカメが山の頂上で九時に会う約束をしました。ウサギは九時に着きました。カメは九時五分に着きました」。この文章を聞いた後に、①どちらが先に着きましたか②後に着いたのはどっちですかという質問に対し、四、五歳児共に九時の方が早い、カメは五分遅刻したという答え。この程度の設問であれば、時刻と時の経過についてはほぼ全員が理解している。又、③ウサギは何故先に着けたのですか④カメは何故後に着いたのですかの質問に、「ウサギは速く走れるけれど、カメはゆっくりしか歩けない」という速さの違いについても理解されているようだ。又「ウサギは約束の時間を守ったけど、カメは守らなかった」、約束を守る守らないという視点から捉える答えも若干ではあるが得られた。

### 幼稚園児の時の指導

今までに述べた、時や時刻を幼稚園生活の中で、どのように指導することが望ましいか。筆者はⅢ報で次の通

り、幼稚園教育指導書・領域編自然（文部省、昭和四十六年、フレーベル館）を引用した。「日常生活を通して時刻について興味や関心をもつためには、日常生活の中で時に関する経験や活動をつませることを通して、時刻について興味や関心をもたせるとともに、おぼろげながら時刻というものの意義に気づくようにすることをねらっている。はじめは「おやつです」「おかえりです」などという教師のことばや合図によって、幼稚園の生活の中で時刻に気づくようにし、しだいに、長くぶらんにのったとか、少ししか遊ばないなどと時間に関することさらに関心をもったり『朝・昼・夕・きのう・きょう・あす』などのことばを使って話したり、食事や帰りの時刻などと関連して時計に関心をもつように導く」。

実践計画の準備段階でも、幼稚園時代の幼児の時間概念は、周囲の物事や自分の経験に結びついて形成されていくこと、自分の外に、時の流れを示してくれる時計の在ることは承知しているが、「時計はいつも等しい速さで動いている」ことなどが理解されていないし、時計そ

のものが時間を動かしているように錯覚する時期でもある。

### 時計のない日

一九九七年一月二十七日（月）の午前九時から午後十二時十五分は、園内外のすべての時計に目かくしを施し、園児たちがどう時を過ごしていくか見守ることとなった。私たち保育者は「時計のない生活」を実施した場合、次の様な事態を予想した。

- 新しい経験活動をはじめらるう
- 通常より早く昼食が始まるらるう
- 園庭では思う存分楽しむ姿が見られるらるう
- 時間制限がない事が不安になる子どももみられるらるう
- 空腹を感じるが、時間を忘れて遊びに熱中するため、その調整ができるらるうか
- 「今、何時」と尋ねられることが多いらるう、答えられない場合、子どもはどうなるらるうか など

当日の朝、「今日は午前中時計が使えません。お弁当を食べる時間は、ひとり決めてください。それまでは先生も時計が使えませんがいつもの通り活動してください」と各クラス共通のメモを用いて園児たちへ伝えた。

そして「時計のない環境下での生活」が始まった。はじめのうちは、園内外で遊ぶ園児たちは、いつもと変わらないように見えた。やがて三十分程経過した頃になると、いつも習慣となっている生活の節目、屋内から屋外への活動の切換え、それぞれ用いた教具の片付けなど、自発的にしたいが、時計もないことが、気になり出すのがわかる。

一方保育室の一隅では年長児A Bと年中児Cは「オセロしよう」と声をかけ合ってオセロの盤と駒を準備した。ジャンケンで順番を決め、AとCが対戦することになった。その間Bは対戦の様子を見ながら、年中児Cの手が進まない時、「あそこにおけば、五つ斜め取りができる」などと助言をしながら、Cに次々と駒を渡す手伝

いをする。AはCに負けない自信があるのか、Bの助言を気にすることは無い。Cに向かって「どこに置くの」と催促する。一回戦は三十分を要し、二回戦はAとB、三回戦はBとCという組合せでゲームを行い、この間約一時間二十分を三人は席を立たずにオセロゲームに集中した(写真下)。

同時に手前の机で年長児三人(D・E・F)が将棋を始めた。こちらも三人グループだが、観戦役のFも時々勝負のつき具合を話したり、テレビのアニメのことを話題にしながら進めている。通常は二試合目の途中で時限になることが多い。今日は四回、五回と時間を全く気に留めないで出来る。「まだやっても大丈夫だぞ」(時計を気にせずにできるという意味)、Fが思い出したように園庭の様子を見に行く。「まだみんな遊んでいるから大丈夫」の声にまた将棋ゲームは更に十二時十五分まで続く。オセロも将棋も対戦していない子の役割は、オセロの駒を渡す、将棋の駒を揃える、本を持ってきて目を通したり、迷路のつづきをやりながら、観戦するというよ



▲将棋(手前)とオセロ(奥)の対戦中の子ら。  
各々三人は半端にみえるが互いに連携しながらゲームに興じ対戦組合せなどトラブルもなく進む。

り参加しているように見える。オセロでのC、将棋でのFを対戦中の二人が受け入れている様子がわかる。「時計のない日」の終わりを告げる「お昼の音楽の時間です」という放送が流れる。一瞬驚いた顔を見合わせるのと、片付けと昼食の準備に立ち上がった。

活動期間中に一番多い教師への質問は、「今、何時頃ですか」である。次は「外へ出てもいいですか」「もう片付ける時間？」などの生活の切換え時を尋ねる質問だった。尋ねられる保育者も時計をもっていないので、子どもと一緒に考え、適当に答える外にない。ぶらぶら移動する子が少ないことに気づく。二時間を経過した頃になると、昼食時間を忘れて思い思いの活動に熱中する子が多く、このままどうなっていくだろうかという不安が教師たちの胸中を横切る。「今、いくじ頃と思いますか？」という質問を教師、園児にしてみる。一人だけ時計をもって行動している調査委員によると、やはり成人の方が、幼児よりも体内時計は正確だったようだ。一つの見方として、指導の立場にあり責任を負っている教師

の体内時計は進み加減で、それを補正できる分だけ正刻に近い。いつもにない自由をあたえられて遊びに熱中している幼児のそれは遅れ気味であった上に補正できないのがストリートに出たということであろうか。

### おわりに

結果的には、事前の教師の予想はほぼ適中していたといえる。そして、小さな混乱も生じないで、時の経つのも忘れて遊びに熱中できたことは、意外な成果であった。しかし、事前の予想の中に、“時計のない環境下で教師自身、どのように時間を使うか”を深く考えていなかったことが惜しまれる貴重な半日であった。

(銀嶺幼稚園)